経済建設常任委員会
道内視察調査報告

委員長　坂田　美栄子

経済建設常任委員会（坂田・松浦・古舘・吉住・平野・橋本）及び小林議長は、6月2日から6日までの5日間、道内4市町村を訪問し、農林業振興や街並み整備の取り組みについて視察調査を行いましたので、その概要を報告いたします。

足寄町

足寄町は、行政区域面積が全国で5番目に広い、人口8千人の農業と林業の町です。

森林面積が84㌶を占めることから、豊かな森林資源の有効活用を図るため、14年度に産学官連携による足寄町木質ペレット研究会を発足。16年12月には異業種14社による「とかちペレット協同組合」が設立され、翌年には旧中学校体育館にペレット工場が建設されました。

ペレットとは、おがくずなどの製材廃材や林地残材などを粉砕、圧縮し、直径6㍉の円柱に成形した固形燃料のことです。

ペレット工場の内部

工場の生産能力は年間700㌧ですが、現在は500㌧程度を生産しており、町内の公共施設や一般家庭（50戸）を中心に主に副暖房用として販売されています。発熱量は灯油の約半分、1kg当たり36・75円での販売ですが、原料確保や流通コスト、高額なストーブの普及などが課題との説明を受けました。

本町もバイオマスエネルギーの利活用に取り組んでおり、地域経済の活性化と雇用対策の面で大いに参考になりました。

江別市

続いて訪問した江別市は、石狩平野の中央に位置する人口12万3千人の街です。

視察した江別製粉㈱は、昭和23年から操業する老舗製粉会社で、18年度売上高は28億円、従業員53名です。道産小麦の普及に力を注いでおり、平成10年には地元農家や企業、大学とともに「江別麦の会」を結成。小麦による地域活性化を目指して活動する一方、安定した収量で品質の高い小麦栽培の研究にも取り組んでいます。中でも、春まき小麦「ハルユタカ」の初冬まき技術の確立に尽力し、もちもち感が特徴の麺は「江別小麦めん」の名で全国的に高い評価を得るなど、大きな成果を収めているとの説明がありました。

説明を受ける委員

また、1時間当たりの製粉能力が1㌧未満の小さな製粉プラントを開発・導入することで、生産者や消費者の声に応えたオリジナルな小麦粉の製品化にも対応しています。道産小麦の品質に強い自信を持ち、地元密着や安全性を追求する姿勢に、企業としてのこだわりを強く感じました。

江差町

道内で最も早く開港した港町江差町は、人口9千6百人の漁業の町です。ニシン漁などで栄えた町内には多くの歴史的・文化的遺産が残されており、歴史の香り漂う街並みの整備を進めています。

歴史的建造物を後世に伝えようと、平成元年には「歴史を生かすまちづくり事業」に着手。これまでに電線地中化や公園整備、建物修景、街路事業などが完了し、旧国道沿いの地区は「いにしえ街道」として情緒あふれる街並みに変わりました。総事業費100億円の約5割が補償費と、地元経済への波及効果も高いとのお話でした。

いにしえ街道の街並み

特徴的な取り組みである建物修景では、町が景観形成条例を制定し、建物の高さや色、形などを制限しています。協力者には建物修景の経費として、歴史的建物に400万円、一般的建物には200万円を限度に補助しているとのことです。

800年に及ぶ江差の歴史を語る皆さんの、誇りに満ちた表情が印象に残りました。

真狩村

最後の視察地・真狩村は、羊蹄山の南裾野に広がる人口2千4百人の静かな村です。

農家戸数は172戸と総世帯数の約2割を占め、耕地面積は3020㌶、うち85％が普通畑です。1戸当たりの平均経営面積は17・4㌶で、畑作4品のほか大根や人参などの野菜を生産しています。食用ゆり根は日本一の産地として知られ、近年はユリ切り花などの花卉生産も定着してきたとのことです。

ここ数年の農業粗生産額は約40億円で推移。販売額は上位から順に、馬鈴薯、大根、人参、食用ゆり根で、安定的な出荷で市場の信頼を得るために前進栽培を取り入れています。また、食用ゆり根は手作業中心で面積が限られる、出荷できるまでに3年が必要、需給バランスで価格が暴落するなど、生産者の苦労も多いとの説明がありました。

おいしい「ものづくり」である農業を産業の軸に、村の関係者が一体となって取り組んでいる様子が伝わってきました。

以上、視察先の概要をご紹介しましたが、今回の視察で得られた情報を基に、美幌町の政策課題に対して意見反映できるよう、今後も委員会としての調査活動を続けて参ります。